令和２年度 つたえる、感じる、つながる、森林×ＳＤＧｓプロジェクト事業
森林空間を活用した教育イノベーション検討委員会（第 3 回）議事概要

1.　開催日時：令和 3（2021）年 2 月 9 日（火）10：00～12：00

2.　場所：Zoom

3.　出席者：　※敬称略、委員五十音順

＜委員＞
・天笠　　茂　　千葉大学特任教授 中央教育審議会副会長
・指出 一正　　「ソトコト」編集長
・島田 由香　　ユニリーバ・ジャパン・ホールディングス株式会社 取締役人事総務本部長
・竹内 延彦　　長野県池田町教育長 森と自然の育ちと学び自治体ネットワーク副代表
・宮林 茂幸（座長）東京農業大学地域環境科学部 地域創成科学科教授
　　美しい森林づくり全国推進会議 事務局長
・山下　　宏　　文京都教育大学教授 元森林 ESD 研究会座長
・吉弘 拓生　　内閣官房地域活性化伝道師 総務省地域力創造アドバイザー

＜オブサーバー＞
・榎木 奨悟　　文部科学省総合教育政策局地域学習推進課 地域学校協働活動推進室 室長補佐

＜林野庁・事務局＞
・安髙 志穂　　林野庁森林整備部森林利用課 山村振興・緑化推進室 室長
・藤岡 義生　　林野庁森林整備部森林利用課 山村振興・緑化推進室 課長補佐
・根岸 由佳　　林野庁森林整備部森林利用課 山村振興・緑化推進室 森林環境教育推進官
・福長 絢一郎　林野庁林政部企画課 課長補佐
・萬宮 千代　　（株）かいはつマネジメント・コンサルティング シニアコンサルタント
・田中 博幸　　（株）かいはつマネジメント・コンサルティング シニアコンサルタント
・川元 美歌　　（株）かいはつマネジメント・コンサルティング シニアコンサルタント
・野口　　翠　　（株）かいはつマネジメント・コンサルティング コンサルタント
・橋本 卓道　　（株）かいはつマネジメント・コンサルティング コンサルタント
・梅永 優衣　　（株）かいはつマネジメント・コンサルティング コンサルタント
・小野 なぎさ　一般社団法人 森と未来 代表理事
・マンジョット ベディ　Just on time CEO

4.　議題：
（1）開　会

林野庁挨拶

（2）議　事

1）森林教育イノベーション調査の結果

2）モニターツアー結果

3）未来予想図ワークショップ結果

4）報告会の開催内容

5）今後の進め方

5. 概要：

（1）林野庁森林整備部森林利用課 山村振興・緑化推進室 安高室長による挨拶。

（2）事務局より、資料 1 に基づき、森林教育イノベーション調査の結果について説明し、質疑応答、討論を実施。各出席委員等からの意見は以下のとおり。

・ 今求められている姿が鮮明に出てきたという印象を受けた。地域内の繋がりという部分を前面に出し、これからの在り方として提示しているのがとても良い。一つ付け加えるなら、学校においては教育課程外の時間の確保は難しいため、教育課程の中に収まる森林環境教育が求められる。社会や理科等の科目に上手く埋め込む連携の仕方が必要である旨ご追記いただきたい。（山下委員）

・ 全体を通してよくまとめられている。その上で申し上げると、学校教育従事者、および、直接的には学校教育に関わっていない方々の双方に、森林環境教育と称される教育活動がどのように学校で行われているかについて、共通理解を持っていただくことが大切である。学校教育従事者に対しては、学校教育について充分に理解していることを伝え、且つ、学校の外にいる方々から、学校教育が先進していること、および、不足していることについてメッセージを伝える。そうすることで、コミュニケーションが生まれ、「つながる」という本プロジェクトの狙いにも結びつく。もう一点、学習指導要領では、小学校 5 年生の社会科で森林について扱っている。教科書では森林のことについて丁寧に取り上げており、考えさせるべき教材、素材を提供しているので、学校における取組の一つとして加えてみては。（天笠委員）

・ 本調査に記載されている現状と課題に対し、解決のためにどんなことができるのかが重要である。特に森のようちえんについては、事業の拡大が困難である一方ニーズが増えているとのことだが、供給の問題に対しどのようなサポートができるのか。働く母親に話を聞いていると、ご自身が直接面倒を見られないことに罪悪感を持っている方が多い。自分が働いている間に子どもに良い体験をしてほしいという気持ちがあるとのこと。子どもが良質な森林体験を受けられることは、働く女性の自己肯定感や仕事のモチベーション向上、ひいては、日本の国力向上に寄与する。青少年教育については、子どもに考えさせるファシリテーション

能力を持つ人材が不足している。先生方を教育するとともに、民間との融合を通じた、子どもに質の高い教育を提供できる仕組みづくりが重要である。特に都市部には森林がないため、ワーケーションやデュアルスクール等を通じ、地域の学校および奥多摩町等の東京都内、近隣県の学校と提携し、森林体験の機会を増やすことが大切。JTB や近畿日本ツーリスト等の中間業者を巻き込み、修学旅行の内容に SDGs に関連する職業体験や森林体験等を盛り込むことも考えられる。また、先進的な取り組みをされている方にインタビューをされたとのことだが、インタビューを通じたアウトプットとして共通するものや、知っておいてほしいこと等があれば、ご教示いただきたい。（島田委員）

・ 上手くいっている事例には根を張っている人がいることが非常に重要であると感じた。誰かが核となって長く続けることで、自然に人の輪ができてくる。コロナ禍でそういったところが存続の危機にあるが、何とか一助になれたらという想いでを報告書の執筆を進めた。（事務局 田中）

・ 木を植えてから森林ができるまで何十年も掛かるため、持続性担保のためには、森と関わっていくと同時に、「森をつくり上げていこう」というキーワードが大切である。島田委員の言う横に繋がる情報のネットワークは非常に重要。また、日本の森林率が約 7 割ということは多くの方が知っているものの、森林に関わる具体的な現状については見えてこない。本報告書とは別に、「森の教育力」や「林業の役割」に係る討論が必要である。（宮林座長）

・ 第 4 章のキーポイントに記載のある「特定の人に我慢させない仕組みが重要」というのは、まさにその通りである。誰もが満足でき、「参画することが楽しい」「わくわくできる」という気持ちが表されると良い。森林のバリューチェーンのように、子どもから大人まで、林業従事者から教育者まで、すべての人が自分たちの価値を持ち寄ることで、日本の森のような空間、環境をつくっていくことが大事だと伝え、それぞれのノウハウを提供できると良い。個人的には、人が入ってくる場所はすべからく「ゆるふわ」であると良いと考えている。少し緩い感じ、ふわっとした感じをキーポイントの中に入れ込み、未来をつくっているイメージが伝わると良い。学校に新しい部活動を作る試みが生まれているというのは、非常に良い視点である。東京学芸大学の国際中等教育学校におけるソーシャルアクション部や、福島県石川高校のボランティア部で活動する学生のように、「街をつくる」「地域をつくる」ことに関心のある学生が生まれているのであれば、「青少年の健全な心をつくる」「自分たちのやってみたいことをやる」といった既存の部活動と同じ価値観の元、ソーシャルアクション部がもっと増えていくと良い。教育機関の方には新しい部活動の新設を期待している。余談になるが、中山間地域のライバルは巨大なエンターテインメント空間である。中山間地域においても、森を通って街の中心部に繋がる等、森を抜ければ「誰かに会える」「わくわくするものが待っている」等の動線がつくれると良い。（指出委員）

・ 様々なインタビューや実証・事例を通じて、縦横斜めの重要さがより浮き彫りになってきた。

縦は幼児期から学童期、小・中学校を通じた一貫した学び、横は学校等を軸にした地域・保護者、近隣のステークホルダーの繋がり、斜めは、企業、NPO 等の地域を超えた支援リソースへの接続を意味する。森林環境教育が、縦横斜めの三次元の中で豊かに発展していくイメージが伝わった。敢えて申し上げるなら、概要版の報告書においては、供給側の視点が強い印象を受けた。学びの主体である子どもの目線で、どんな風に成長しているのか情景が浮かぶようなエピソードを、詳細版では加えていただけると伝わりやすいのでは。（竹内委員）

・ 行政の異動がリスクとあるが、チャンスでもある。異動を、新しい風を吹き込み、知と方法が生まれるチャンスだと捉え、行政の異動を効果的に使っていくということを上手く伝えられれば良い。加えて、本事業における「SDGs 時代」とは何か注釈で入れておくと読みやすい。（吉弘委員）

（3）事務局から、資料 1 に基づき、森林モニターツアーの結果について報告し、動画を放映。その後、質疑応答、討論を実施した。各出席委員等からの意見は以下のとおり。

・ 2 日間モニターツアーに参加し、気が付いたことがいくつもあった。まず、東京都内にこんなにも豊かな森があるということ。森林に関係することを総合的に体験し、客観的に見られたことが大変良かった。森林には色々良い点があると知ってはいたものの、多くの人と同じ時間をシェアしながら体験できたことが素晴らしかった。他方、ワーケーションを推奨する立場から申し上げると、森林空間までの道中で仕事ができると、なお良いと思う。JR 東日本が新幹線オフィスの実証実験を行っているように、列車の中で仕事ができる環境が整えば、より多くの人にご体験いただけるのではないか。（島田委員）

・ 森林教育イノベーション調査の結果報告に対して提案したことが、モニターツアーの動画や発表資料の中に表されており、嬉しく思った。子どもたちの表情、動きを通して学びの良さが感じられるということを改めて実感した。学術的観点からの表記に加え、色々な方々に訴えるような内容を上手くミックスし、報告書にも反映いただけると良い。（竹内委員）

・ 動画を見ながら温かい気持ちになり、「子どもにこういった体験をさせたい」というわくわくするような気持ちが生まれた。マンジョット氏から「真実の声」について説明があったが、今まさに私が発言したのが「真実の声」なのではないか。見せ方によって色々な工夫ができてくるので是非ご活用いただきたい。（吉弘委員）

・ とても素敵なプログラムで、そこから得られたものが粒度の高い形で提言に入っていたのが印象的であった。生活観光が皆の楽しみになっていく時代なので、ワーケーションを通して「人に出会うこと」そのものが観光の資源であると広く認識されれば、地域の力になるのでは。（指出委員）

・　動画を拝見し、森の魅力が伝わってきた。今後もし機会があれば、子育て世代、ビジネスパーソンに加え、仕事を退いて第二の人生を歩み始める前期高齢者に対しても、森の中での生活の魅力について訴求できると良い。（山下委員）

・　森林教育イノベーション調査とモニターツアーの発表が繋がっていることが実感できた。前者が学校編、後者は学校の外という整理の仕方もできるかと思う。加えて、Society5.0 またはデジタル社会の正の面、負の面に対し、森林が向き合うことで、森林環境教育の存在をよりクローズアップできるのではないか。更に、それぞれの世代にとっての森林が、2 次元、3 次元に重なってくる。一つ一つ組み立て、互いに繋ぎながら、全体的な提案に持ってくと良い。（天笠委員）

（４）事務局から、「2050 年の未来予想図」ワークショップの結果について報告し、動画を放映。その後、質疑応答、討論を実施した。各出席委員等からの意見は以下のとおり。

・　ワークショップの動画を大人が見ることは、子どもが学ぶ様子から我々が学ぶという意義がある。提言にも記載があるが、この時間をいかに担保するかが要となる。企業においてもワークショップ、トレーニング等の体験型のプログラムを企画すると、時間がないことが課題となる。体験型であればあるほど、効果や効用、KPI（重要業績評価指標）が求められる。改めて学校教育の中で、自由な時間を作ることが非常に大事であると感じた。この活動は貴重な体験であり、全ての子どもに体験いただきたい。（島田委員）

・　とても素晴らしいワークショップだと思った。「愛・地球博（2005 年日本国際博覧会）」が開催された当時、10、20 代だった方が現在の「ソトコト」の誌面を飾ってくれている。最初は関心が高くなくとも、ワークショップを通じて知らないものに出会うことで、プレイヤーが生まれ、森林や SDGs を考えられる大人が育っていく。バトンを常に渡し続けるような形で、続いていくことが提言に盛り込まれることが大切。この映像が色々なところに届くと良い。（指出委員）

・　子ども自身が自分たちの言葉で語ること、そして、それによって大人が気づくことが大切。森の中で子ども自身がカメラを回して、興味を持ったところを撮影し、動画を編集するということも、学び方の一つとして面白いのでは。（竹内委員）

・　「自由な発想」という話が出たが、大人の都合ではなく、子ども自身が「こういう未来を描きたい」という夢を持ち、その実現のためにどのようなアプローチしていくか伝える場を作ることで、「Happy forest」な社会に繋がっていくと感じた。（吉弘委員）

・　SDGs や持続可能な社会の実現がテーマなので、未来の姿を考えていくことが非常に重要。子どもの未来の姿が、文化的な側面、環境的な側面は出てくるが、生産的な側面は、どうして

も弱くなってしまう。生産の場としてどうしていくのかについても、付け加えていくと良い。（山下委員）

・　バックキャスティングの考えで、生産の場を見つめることは必要である。また、「メタ森林」という言葉も DX と掛け合わせてイメージしたい。（指出委員）

・　報告書の全体的なまとめについて、森林教育イノベーション、モニターツアー、ワークショップの構成について、どのように考えられているのか。全体をまとめる立場からすると、読み手に意図と狙いを伝える方法について、もう一段知恵を絞るべきではないかと考える。個人的には、教育イノベーション調査の後に、学校における森林環境教育の課題に対する取り組みとしてワークショップを挿入しても良いと考える。あるいは、教育イノベーション調査、モニターツアーを総括するものがワークショップという位置づけなのか。報告書の構成をどうするのかによって、ワークショップの報告が活きてくるかもしれない。（天笠委員）

・　個人的には、最後のまとめのところで、課題が述べられるという構成を考えていた。他方、天笠委員のおっしゃる通り、モニターツアーとワークショップを入れ替えると、それなりにまとまりができるかもしれない。事務局、林野庁との協議の上検討する。また、報告書をどういった立場の方に見せていくかが課題だと感じている。報告書を読んで、森林環境教育を発展させていけるような方に配布したい。（宮林座長）

（５）事務局から資料 2 に基づき、報告会の開催内容について説明。各出席委員等からの意見は以下のとおり。

・　パネルディスカッションの①話題提供「学校教育と森林環境教育のつながり」について、パネリストから意見をいただくトピックの順番は「別関心層を森林空間に呼び込む工夫とは？」を最後にしては。（宮林座長）

・　ご提案の通りに修正する。（事務局　萬宮）

（６）事務局から今後の進め方について説明。

以上